新しいコレクション

森村泰昌《烈火の季節／なにものかへのレクイエム（MISHIMA）》

森村泰昌（1951- ）
《烈火の季節／なにものかへのレクイエム（MISHIMA）》

2006年
HDTV カラー サウンド
7分47秒
平成26年度購入

© the artist
courtesy ShugoArts

これまで森村泰昌は、古今東西の名画の中の人物に自分を入れ込ませたり、伝説的な女優に扮したりしてきました。ジェンダー論やオリエンタリズムといった今日的な問題を取り上げる彼の作品は、美術の世界以外からも高い評価を得ています。

そんな森村が二〇世紀をテーマにした「なにものかへのレクイエム」をつくりはじめたのは二〇〇六年のこと。そのシリーズには、以前からの「変化」を確認できます。ひとつは、レーニンや（チャップリン演じる）ヒットラーといった「人物」のみならず、山口二矢（おとや）による社会党委員長の暗殺といったような「事件」をもモチーフにするようになったこと、ひとつは、作品内容が政治や歴史に直接的に及ぶようになったこと、ひとつは、これまで森村が扮してきたのは、女性や欧米の歴史的人物など、彼にとって明確な他者がほとんどであったのに対して、日本人の男性のようなより近い人物が対象になったこと、等々です。

本作にはそうした「変化」が凝縮しています。演じられているのは、一九七〇年十一月二十五日に三島由紀夫が、陸上自衛隊の市ヶ谷駐屯地で、憲法改正のためのクーデターを起こす事を自衛隊に求めた歴史的な事件。よく知られているように、三島は、演説を約七分で切り上げ、バルコニーから立ち去った後、自決しました。

この演説を換骨奪胎して作品にするのであれば、当然、「最後」をどのようにするのかが肝となります。森村はどうしたか。彼は、その演説が最初から誰にも届いていなかったのではないかと思えてしまうようなオチをつくりました。実際、三島の演説は、自衛隊員たちのヤジや報道ヘリの音にかき消されてよく聞こえなかったと言います。

でも、そんな周知の事実がテーマになっているはずなどない。たとえば、一九七〇年が、大阪万博をひとつのきっかけとしてテレビのカラー化が進んだ年であったことを思い出すならば、マスメディアが、大きな力を持つようになっていった時代における個人の主義主張のあり方をユーモアとともに浮かび上がらせたのだとも言えます。また、三島がマイクを使わず演説をしたことを思い起こせば、メディア（媒介）を通さない身体的な演説というパフォーマンスが有効であった時代に対する関心の表明なのかもしれません（「言葉」に対する「声」への信頼だとも言えるでしょう）。ちなみに本作がつくられた二〇〇六年は、ツイッターがスタートした年。政治や歴史に対して影響力のある声の持ち主がマスメディアから市民へと変わりつつある時代において、「最後の演説」が取り上げられた、そう考えることもできるのではないでしょうか。

（美術課主任研究員　保坂健二朗）